

令和2(2020)年度 栃木県イノシシ管理モニタリング結果報告書の概要

捕獲数と捕獲の分布

- 1 捕獲数
捕獲数は11,252頭(対前年度比93%)
【狩 猟】1,088頭(対前年度比67%)
【有害捕獲等】10,164頭(対前年度比97%)
- 2 捕獲の分布
【狩 猟】県南西地域、県東地域で多く捕獲
【有害捕獲等】県南西地域、県東地域で多く捕獲

月別捕獲数

- 【狩 猟】11月下旬に捕獲数が最も多くなり、それ以降減少傾向であった。
【有害捕獲等】11月に捕獲数が急激に増加し、それ以降減少した。

捕獲効率(CPUE)と捕獲努力量

- 1 捕獲効率(CPUE:単位努力量当たりの捕獲数 銃:頭/人日 わな:頭/100基日)
【狩 猟】銃は横ばい、箱わな及びくくりわなで減少
銃:0.04 箱わな:0.44 くくりわな:0.18
(前年度 銃:0.04 箱わな:0.55 くくりわな:0.21)
【有害捕獲等】銃、箱わな及びくくりわないずれも減少
銃:0.02 箱わな:0.56 くくりわな:0.20
(前年度 銃:0.03 箱わな:0.64 くくりわな:0.23)
- 2 捕獲努力量
【狩 猟】銃、箱わな及びくくりわないずれも横ばい傾向であったが、令和2(2020)年度は減少傾向である。
【有害捕獲等】銃は平成29(2017)年度以降減少傾向であったが、令和2(2020)年度は増加、箱わな及びくくりわなは増加傾向である。

捕獲の方法

狩猟ではわなが全体の約7割、有害捕獲等ではわなが全体の約9割を占めている。

- 【狩 猟】銃:27% わな:73% (前年度 銃:27% わな:73%)
【有害捕獲等】銃:2% わな:92% (前年度 銃:2% わな:88%)

被害の発生状況

- 1 農業被害
被害額は126百万円で前年度から増加(令和元(2019)年度:121百万円)
農作物別では稲が被害全体の53%を、いも類が17%、飼料作物が5%を占める。

被害対策実施状況

- 1 農業被害
侵入防止柵:約41km
里山林整備:52ha
集落単位での獣害対策支援(アドバイザー派遣集落):12地区

狩猟者の状況

狩猟者は、この40年間で1／5程度に減少し、近年、60歳以上は約6割と高齢化が進行してきていたが、平成26(2014)年度を境に下げ止まりとなり、それ以降、49歳以下の若手狩猟者が増加傾向にある。

令和2(2020)年度の狩猟免許取得者は297名で、令和元(2019)年度(312名)に比べ15名減
【網・わな猟】196名(R元年度:218名) 【銃猟】101名(令和元年度:94名)

総合評価

1 捕獲数と捕獲の分布

令和2(2020)年度の捕獲数は、平成30(2018)年度より減少したが、高い水準を維持していた。有害捕獲における目撃効率と捕獲効率が低下したものの、箱わなとくくりわなの努力数量の漸増傾向が続いており、県や市町の施策による捕獲意欲向上が要因であると考えられる。

捕獲分布については、平成30(2018)年度からの3年間で、平野方向に加えて県北西部の山岳地帯にも捕獲エリアが拡大していることから、有害捕獲等の一層の推進が必要である。

2 被害の発生状況

イノシシによる農作物被害額は、平成28(2016)年度から減少に転じており、令和2(2020)年度はピークであった平成27(2015)年度比71%となった。また、発生初期の平成15(2003)年度は、県東地域と県南西地域が主な地域であったが、被害地域は拡大し、平成2(2020)年度は19市町で被害が発生していることから、初期対策の重要性について啓発し、各種事業を活用した地域ぐるみの対策を推進していく必要がある。特に、被害額が最も大きく推移している県東地域では、一層の働きかけが必要である。

3 被害対策

地域ぐるみで獣害に強い集落づくりを進めるため、平成29(2017)年度から実施した「とちぎ獣害対策アドバイザー派遣事業」を実施した集落において、被害が減少する等の一定の成果がでている。今後も引き続き、各種事業を活用して地域ぐるみの総合的な被害対策を促進していくほか、対策の成功事例を広く発信していく必要がある。

また、令和2(2020)年度までに県内12市町において被害対策を担う鳥獣被害対策実施隊が設置されている。実施隊により迅速な対応や市町単位での対応が期待されることから、引き続き活動を強化していくとともに、未設置市町への設置の働きかけを強化する。

4 捕獲の担い手

イノシシの捕獲数の90%がわなで行われており、そのうちくくりわなが55%、箱わなが35%を占める。くくりわなは、1つのわなで一度に1頭しか捕獲できないが、幼獣から成獣まで満遍なく捕獲できる。一方、箱わなは、1つのわなに対して複数(群ごと)捕獲できるが、警戒心の低い幼獣のみが捕獲されやすい傾向にある。今後の捕獲の推進に当たっては、猟具の特性を活かした適切な捕獲ができるよう、近年増加しているわな猟の免許取得者に対し、ベテランハンターから技術を伝達し、スキルアップを図ることが重要である。また、ICTを活用した効果的捕獲手法の実証・普及も進めていく必要がある。